校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第８号

令和３年５月１７日

絆

○台湾

映画「千と千尋の神隠し」を思わせる台湾の九份⇒

台湾に2度ほど訪れたことがあることは、第7号で触れたところですが、今回はその時のことを少しお話ししたいと思います。

はじめての訪問は、25 年ほど前でした。台湾桃園国際空港（当時は蒋介石にちなみ中正国際空港）に降り立ち、高雄、知本温泉、花蓮、台北で泊まる4泊5日の台湾1周でした。植生だけでなく、高雄では台風が直撃したこともあって、北回帰線が通る緯度の低い南の国であることを実感しました。知本温泉では、持ち帰り用の温泉タオルがあり、各地の土産店などで日本語が通じる年配の方に何人もお会いしたことと合わせて、戦前日本が統治支配をしたことを痛感しました。

花蓮では、「阿美文化村」での民族舞踊ショーを鑑賞しました。台湾には、蒋介石率いる国民党とともに1949 年頃台湾に渡った人、清朝の時代に渡ってきた人、鄭成功で有名な明の末期に渡ってきた人、アミ族などもともと台湾に住んでいた人など一口に台湾人といっても多くの人がいることを知りました。ダイバーシティという言葉が一般化していますが、1990 年代はまだまだこれからでした。アイヌ民族からはじめて国会議員となった萱野氏により旧土人保護法の廃案が提案され、「アイヌ文化振興法」が制定されたのがこの頃だったと思います。「ダイバーシティ」が、多様性やそれを認め受容することに対して、それをどう活かすか個人レベルで考えること、最終的にはすべての人の利益になることを目指す考え方が「インクルージョン」だと捉えています。インクルージョン（inclusion）は直訳すると包括という意味です。人間の多様性を尊重し、障がいのある子どもも障がいのない子どもも共に教育を受けるインクルーシブ教育は、共生社会において最も大事な教育の一つです。

自ら中学校中退やトランスジェンダーであると公表した台湾のオードリー・タン氏は、2016 年に 35 歳という若さでデジタル化の担当大臣に任命され、台湾の新型コロナウイルスの感染対策を成功に導いた人物として世界中の注目を集め、「世界一受けたい授業」にも出演されました。このことが象徴するように、ダイバーシティ、インクルージョンが台湾で浸透しているのは、台湾には様々な人々がいることを認めてきたからかもしれません。台湾で出会う人はみんなやさしいと感じました。これは、多様な人を受け容れていく社会だからかもしれません。台湾では、心の知能指数といわれるEQが重視される国というのも納得できます。

写真の九份には2度目に訪れました。写真を見て、台湾はすべてがこんなところと思い込む人もいるかもしれません。訪れる前は私もその一人でした。日本では「忖度」という言葉にも象徴されるよう、相手の感情を読んで行動することがよくあります。それが思い込みであって、場合によっては偏見につながることもあります。それを防ぐためにもいろんなことに関心をもち、感じて、触れて、疑問をもち、考えていくことが大事だと思います。課題解決学習の本質はそこにあると思っています。